最終弁論――「女性の問題」は、本当にそんなに重要なのでしょうか

Hans-Jörg Ronsdorf · 2021年5月 · 2026年10月改訂

ある姉妹が私に、この問題は神学（だけ）の問題ではないと指摘してくれました。それは人間の問題です。少女たちと女性たち、そして彼女たちの尊厳と、彼女たちが認められることの問題なのです。私は男性として、このテーマ全体を男性の視点から見ています。それは女性たちの声を直接伝えるものではありませんが、彼女たちのために語るものです。

私は、この階層的・宗教的な構造（補完主義）が、多くの女性の中にある何かを傷つけ、あるいは壊してきたのではないかと危惧しています。私の本に寄せられたわずかな反響も、この見立てを裏づけています。表に出ない数はもっと多いでしょう。特に、男女が対等な社会で育ちながら、自分のキリスト教会の環境では古代の男女の役割モデルによって「教えられて」いる若い女性や少女たちのことを思うと、そう思わずにはいられません。この相反する状態に、どう向き合えばよいのでしょうか。

問題はいくつかの（禁じられた）奉仕ではない

はっきりさせておきましょう。問題は主に、女性が説教したり、教えたり、指導したりしてはならないということではありません。多くの女性はいずれにせよそれに慣れてしまっていて、それがいつか変わるかもしれないという視点を失っています。彼女たちはしばしば、こうした構造や規則を自分にとっての聖書的な真理と見なし、自分でもこうした主張をもはや問い直しません。しかし、問い直すべきなのです。それを私は、真理を認識するための健全な格闘と呼びたいと思います。とりわけ、この認識が初代教会以来、揺るぎなく存在してきたと考えているときにこそです。このことは、聖書の多くのテーマに当てはまります。時には、テーマをもう一度初めから一字一字たどり直さなければならないのです。

表題の問いは、私が自分の本（題名：『Frauen, vergebt uns!』（『女性たちよ、私たちを赦してください！』））や記事で、何度も何度もこうした（「フェミニスト的な」）問いを提起していることに対する、ほとんどうんざりしたような反応です。私の考えでは、この問いは次のことを言おうとしている、あるいは軽く扱おうとしています。姉妹たちには、教会でも神の国でも家庭でも、協力し、自分の賜物を伸ばす務めや機会がこれほどたくさんあるのだから、彼女たちが説教したり、教えたり、指導したりしてはならないとしても、それが差別であるはずがない。だれにでも、すでに創造の秩序が定めているとおりの居場所と役割があるのだ、と。

しかし、全体像を見ようとするなら、問題は、女性には認められていないとされる二つか三つの奉仕のことではありません。問題は、その背後にある女性像全体なのです。それがそんなに重要なのかというこの問いの背後には、女性は（従属的な）助けとしてアダムのために造られ、階層的に彼に付属し、彼の下に置かれ、あるいは彼の後に位置づけられている、という考えがあります。**ここに、多くの（すべてではありません）女性たちが苦しんでいる問題の根があるのです。**外

からはしばしば見えませんが、内面の、深く隠された不安があり、不当さの感覚があります。女性が女性であるというだけで、男性と同じように尊重されないときにです。自由に考えることができず、律法的な枠の中で考え、行動しなければならないとき（何をしてよくて、何をしてはいけないのか）、しかもその枠が敬虔なものとして美化されているときにです。女性の役割についてのこのような見方は、主にある多くの姉妹たちを、苦しい問いと自己不信の中に置き去りにしています。それが神のご計画なのだと叩き込まれている限り、彼女たちは、なぜ神がそれをそのように望まれたのかと自問します。神が善であり完全であるなら、なぜ女性たちは、キリスト者の結婚の中でひどいことを経験し、教会の中で普通の理性では理解できない制限を経験するのでしょうか。**神の戒めは常に良いものであり、神は私たちがその意味を理解することを望んでおられます。そしてその意味は（少なくとも新約聖書においては）常に明らかです。ところがこの問題においては、まったく納得のいく理由が見当たらないのです！**

男性が感じること、感じないこと

これは、私たち男性がそのような形では知らない感覚です。男性が弱い立場に立つことはめったにありません。今こそ、それに気づき、それに対して敏感になるべき時です。一部の男性の考えや思考の中では、女性たちのこうした劣等感を理解することは不可能であるように見えます。

このテーマにおいて感情がこれほど高ぶる本当の理由は、もしかすると聖書への忠実さというよりも、むしろ自分の指導的役割、自分がかしらであることが問い直されることに対する、自分自身のプライドなのではないでしょうか。もしかすると、それは無意識のうちにだけかもしれません。突然、妻が夫と同じ権利と義務を持つことになるというのですから。何十年もの間、別の見方をし、別の生き方をしてきたのであれば、この認識は、もしそれが訪れるなら、地震に等しいものとなります。誤りを認めるだけでなく、別の形の共同生活に切り替えなければならないのです。それには力が必要です。まず洞察が必要です。しかし聖書の道は、いのちへと通じています。いつでもです。

女性の問題において私たちは聖書をどう読むのか

これほど感情的に高ぶるテーマを、私はほかに知りません。まるで生死にかかわる問題であるかのようです。イエスの人格、その神性、その贖いの御業といったテーマであれば、それも理解できるでしょう。しかし、女性が礼拝で祈り、預言的に語ってよいかどうかという問題では理解できません（よく見て、文脈に注意を払い、まさに聖書の大きな全体像にも目を向けるなら、パウロはそれを当然のこととして前提にしているのです）。

女性の問題に関して、私たちは聖書をどう読んでいるでしょうか。**私たちはこのテーマ全体を、テモテへの手紙第一2章とコリント人への手紙第一14章のわずか二つ（！）の節を通して見ているのではないでしょうか。もし私たちが、ほかの重要な教理上の問題においても、このように二つの節に狭められた形で聖書を読み、判断するとしたら、いったいどのようなゆがんだ教えが出てくることでしょうか。そして、聖書の資料全体を健全で納得のいく関係の中に置き、比較検討することをしないとしたら。そうしてこそ、健全な教えが生まれるのではないでしょうか！**

そうなれば、私たちは律法学者たちのように読み、聖書の中に永遠のいのちを見いだそうと考えながら、聖書が証ししている方、すなわちキリストに出会い損なってしまいます（ヨハネ5:39）。私たちがこれほど愛している聖書は、女性たちを自由へと、学ぶことへと、告白し、証しし、礼拝することへと導いた方について証ししているのです。

女性についての聖書の全体像を正当に評価し始めましょう。誤解された二つのパウロの言葉によってそれを解釈するのではなく。

感じ取る力

多くの女性は、聖書を読むとき、イエスが女性たちとどのように接しておられたかを見るとき、何かがおかしいと感じ取ります。指導し、かしらであるべき、あるいはそうありたいと望む男性たちが失敗するのを見るとき、彼女たちにとって事態はさらに難しくなります。彼女たちとは違って、まさにその男性たちにこそ、神からこの役割が委ねられているとされているにもかかわらずです。それなのに、どれほどしばしば、妻たちが火中の栗を拾っていることでしょうか。

これが、私の本への反響から私が受け取っている印象です。**この本の題名は、とてつもなく大きな空白を埋めているように思われます。私がこの題名に決めたときに考えていたよりも、ずっと大きな空白です。**

もちろん私は、この種の階層が愛のうちに生きられている結婚も知っています――身近な人にとってさえ知りうる範囲で、ではありますが。しかし、それは階層が正しく、聖なるものであることの証拠になるのでしょうか。決してそうではありません。何となくうまくいっているからというだけで正しいと思い込んでいる誤ったことを、私たちはどれほど多く考え、行っていることでしょうか。

そうです。「女性の問題」は絶対に重要です。それは、私たちの神観と人間観にかかわることだからです。この像のあらゆる乱れとゆがみを取り除き、正すことが問題なのです。どうか神が私たちをあわれみ、この務めにおいて助けてくださいますように。誤った像は想像もつかないほど深く根を下ろしており、しかも多くの人にとって神の真理であるかのように見えているのです。実際には、それはこの世的なふるまいです。それは時代精神です。ただし、私たちの住む地域の二十一世紀の時代精神ではなく、過ぎ去った二十世紀と十九世紀の時代精神なのです。

私たち男性が、キリストが教会を愛されたように（エペソ5:25）自分の妻を愛そうとするなら、私たちは愛をもって彼女をこの誤った差別的な役割から連れ出し、神の創造の秩序の中で彼女にふさわしい場所を彼女に明け渡し、空けることになるでしょう。

実のところ、女性の問題は、深いところで男性の問題なのです。私たち男性は、自分自身を問い直さなければなりません！なぜなら、新約聖書の階層的な、そして時には家父長的な読み方に責任があるのは、いったいだれでしょうか。**男性たちは聖書解釈における主導権をわがものとし、それが自分たちの専売特許だと思い込んできました。何という思い上がりでしょうか。**御霊の賜物は性別によって配られるのではありません。このようなふるまいによって、女性たちの数えき

れない賜物が忘れられ、抑えつけられ、締め出され、見過ごされ、弱められてきました。御霊を消すこと（テサロニケ第一5:19）は、本当に些細なことではありません。教会を指導し、進路を決めているのは男性たちです。女性たちにはそこで発言権がありません。あるとしても、夫を通して非公式にだけです。しかしその夫たちは、自分の指導者の集まりの中で、自分が妻の意見に従っているとは決して認めないでしょう。

私が目指していないこと

問題は、教会の近代化（場所や建物のことではありません）でも、時代の最先端に立つことでもありません。**問題はイエスへの忠実さであり、それこそが聖書への忠実さなのです！**近代化ではなく、女性の問題における宗教改革です。「女性の問題」という、この怪しげな言葉をこれで最後にもう一度だけ使うとすれば、ですが。

問題は、神学論争に勝つことではありません。このテーマはそれには向いていません。人々（とりわけ主にある姉妹たち）が直接かかわっており、それぞれの見方が、教会においても、神の国においても、結婚と家庭においても、生き方を強く形づくるからです。

しかし、まさに論争だけが、異議申し立てだけが、そして預言的な語りかけだけが、このテーマを新たに動かすことができるのです。対話と建設的な議論がなければ、ここではすべてが元のままにとどまるでしょう。

分裂の理由になるのか

この問題における感情の高まりは、すばやく徹底した行動へと人を駆り立て、それはしばしば別離、分裂、教会分裂に終わります。ある人々にとっては神の定めた境界線が越えられているのに、ほかの人々にとってはそのような境界線は存在しないのです。では、どうすればよいのでしょうか。

緊張に耐えることは、しばらくの間はできるでしょう。しかし、この問題は双方にとって非常に多くのものを含んでいるので、最後には一緒に歩むことはできなくなるでしょう。ある教会でそれぞれ慣習となっていることに耐えられるのであれば、話は別です。そうです、神も多くのことに耐えておられます。私たちが想像できる以上に多くのことにです。悪いことを良しとされることなしにです。

ですから、それぞれが自分で決めなければなりません。私の考えでは、この緊張の中で、互いに責任を持てる範囲で歩み寄る中間の道を取り決めることも難しいでしょう。

このテーマについて解決策を示すことができないことを、お許しください。分裂はたいてい悪いものです。しかし、妥協もまた悪いものになりえます。

女性たちは立ち上がらなければならない

人生には、自分でしかできないことがあります。だれも私たちに代わってそれをすることはできません。女性たちは立ち上がり、自分の道を見極め、誤って理解された服従から抜け出さなければなりません。大きな教会の中には、目を覚まし、性の問題において何かがひどく間違っていることに気づいた女性たちがいます。こうした運動についてどう考えようと自由ですが、私はホセア書8章7節とともにこう言います。**風を蒔く者は、嵐を刈り取る。**

Nice Girls Don't Change the World――真実の言葉です（「お行儀のよい女の子は世界を変えない」。リン・ハイベルズ（Lynne Hybels）の2005年の本の題名です）。このテーマはあまりにも凝り固まり、侵すことのできない真理となってしまったので、それに立ち向かうためには拡声器を使うことさえふさわしいのです。救いにかかわると見なされているほかのキリスト教の真理については、大声で叫ばれているではありませんか。

もう一つの選択肢は、すべてを今のままにしておくことです。そして、あの大いなる日に、主の栄光と明るさと真理を前にして、私たちが、両方の性がともに間違っていたことを認めなければならなくなるのです。男性たちはその認識において、女性たちはこの聖書的とされる真理を受け入れたことにおいてです。そのとき、大きな機会は失われ、永遠に過ぎ去ってしまいます。

今、男性も女性も臆病であってはなりません！真理のために立つことには、いつも代価が伴います。**教会の歴史の中で、多くの勇気あるキリスト者の女性たちと男性たちが繰り返し勇敢に立ち上がり、流れに逆らって泳いでこなかったなら、すべては台無しになっていたことでしょう。**そして私たちはそれをよく知っています。キリスト教のあらゆる運動と潮流は――私たちもそのどれかに属しているのですが――勇気ある、祈る女性たちと男性たちによって始まったのです。

やがて来る時と今

永遠においては、このテーマが私たちにつきまとうことはありません。感情も、非難も、決めつけも、もはやありません。男と女は、ただ兄弟と姉妹のようになり、階層と一方的な服従は過去のものとなるでしょう。堕落した世界と乱された創造の秩序に属する過去のものとなるのです。

ですから、私たちにできる限り、今すでに、この新しい創造の自由と力に生きようではありませんか。私たちは、復活され高く上げられたメシアのうちに、その新しい創造となったのですから！